志賀直哉『菜の花と小娘』とアンデルセン

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2016-09-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 冨澤, 成實 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/18089

明治大学教養論集　通巻五〇四号（二〇一五・一）六七―八五頁

志賀直哉『菜の花と小娘』とアンデルセン

冨澤成實

1

大正九（一九二〇）年一月、児童文学雑誌『金の船』に発表された『菜の花と小娘』は、よく知られているとおり、作者・志賀直哉自身によって「三つの処女作」（「細川書店版「網走まで」あとがき」、細川書店、昭22・7）のうちのひとつに数えられた作品である。[1] 後で詳しく検討することになるが、はじめの執筆と実際の発表との間にはかなり長い時間の経過があり、さらに草稿と決定稿との間にけっして小さいとはいえない内容の違いも認められる。このため、作者の言葉にそのまま従ってこの作品を処女作と認定することに対しては、十分に慎重でなければならない。しかし一方で、作者自身が繰り返し、この作品のもつ処女作性を主張していることもまた疑いないことなので、志賀直哉文学の出発に関わる重要な作品であることを前提として『菜の花と小娘』について検討を進めることができるだろう。

『菜の花と小娘』を「処女作」とする一方で、この作品がデンマークの作家・詩人であるアンデルセン（一八〇五～一八七五）の影響を受けていることを、作者はいろいろなところで繰り返し述べている。『白樺』を創刊する明治四三

（一九一〇）年ころまでの青年時代に彼が接した外国文学は、たとえば、トルストイやゴーリキー、チェーホフ、ツルゲーネフ、モーパッサン、メーテルリンク、イプセンなどであり、この経験が彼の創作活動に何らかのかたちで作用しただろうことは、改めて言うまでもない。本稿では、「処女作」『菜の花と小娘』に与えたアンデルセンの影響を明らかにするための基礎的な作業として、日本におけるアンデルセンの受容のおおよその状況を視野に収めながら、『菜の花と小娘』の成立過程と、志賀直哉のアンデルセンへの関わりや読書の閲歴について検討したい。

2

『菜の花と小娘』の創作の背景について、志賀直哉自身はいろいろなところで語っているが、そのなかでもっともよく知られているのは、「続創作余談」（『改造』昭13・6）のなかのつぎの一節であるだろう。

高等科の頃、一人上総の鹿野山に行つた時書いた「菜の花と小娘」を別の意味で処女作と云つていいかも知れない。アンデルセンのお伽噺を愛読してゐた時で、其影響で書いたものだ。如何にも子供らしい甘いもので、そのまま十何年か仕舞ひ込んで置いたが、我孫子に住んでゐた頃、ある婦人雑誌で五円の懸賞金でお伽噺を募集してゐるのを見て、家内に儲けさしてやらうと云ふので、一ト晩かかつて、少し長かつたのを条件通り六枚に書縮め、翌日家内に清書さして、家内の名で応募したところ、見事落選、原稿もそのまま返つて来なかつた。それから間もなく「金の船」といふ子供雑誌から原稿を頼まれ、再び家内に清書さして送つたところ、今度は十八円の原稿料を貰ひ、却つて儲かつた。

作者の言葉を額面どおりに受け取れば、「高等科の頃（中略）書いた「菜の花と小娘」」と、「「金の船」といふ子供雑誌」に発表した『菜の花と小娘』は、文章の長さにいくらかの違いはあるものの、基本的には同一内容の作品だということになるだろう。発表した時期こそ後年のことだが、執筆それ自体はすでに作家デビュー以前の、いわば習作時代に行なわれていた――作者がこの作品を処女作とみなす理由はこうした点にある。しかし、このような説明が実は曖昧な点をもち正確性に欠けていることは、すでによく知られているとおりである。

最初に明確にしておく必要があるのは、「高等科の頃、一人上総の鹿野山に行つた時書いた「菜の花と小娘」」という記述内容は、実は正確なものとはいえない、ということである。あまりに当然のことだが、この「菜の花と小娘」というタイトルは、大正九年一月発行の『金の船』掲載作品に付けられたものであり、他方、学習院の学生時代に書いたという作品には、後で述べるように、それとは異なるタイトルが付けられていたことが今日では明らかになっているからである。また、いま引用した「続創作余談」の記述に関して、ここでは執筆時期が「高等科の頃」とされているもの[2]、この「続創作余談」で述べたときよりも前の時点では、「中学時代に書いたもの」（「本年発表せる創作に就いて（一）――好きな作と不満足な作」、『新潮』大9・12）、「明治三十五年頃（中等科在学中――括弧内稿者）」（短編集『荒絹』、春陽堂、大10・2）、「明治三十七年（高等科一年次――括弧内稿者）」（全九巻『志賀直哉全集』、改造社、昭12～13）、「日露戦争の時」（「私はかう思ふ」、『文藝』昭27・6）、「明治三七年五月五日」（全一七巻・新書版『志賀直哉全集』、岩波書店、昭30～31）などというようにそれぞれ記され、そのなかには異なる年が示されていたこともあったのだった。すでに長い時間が経過しているためか、このように習作時代に書いた作品の執筆の時期について、それぞれに回想をめぐらした作者自身でさえもその時々で混乱や錯誤を抱えていたようである。

こういった点からだけでもある程度窺えるように、『菜の花と小娘』の成立にいたるまでの過程は錯雑とした状況に

ある。おおよそのプロセスを把握するために、明らかになっている基本的なことを改めて整理しておこう。

注目すべき最も重要な資料として、「花ちゃん」という、全一五巻『志賀直哉全集』（岩波書店）と全二二巻・補巻六『志賀直哉全集』（岩波書店）のどちらにも収録されている文章がある。四〇〇字詰め原稿用紙に換算して一二枚ほどの作品である。寂しい山奥で発芽したわが身の不運を嘆く菜の花を、主人公の「花ちゃん」という娘が麓の村まで山道を下って連れて帰るという、『菜の花と小娘』とほぼ同一の筋立ての物語なので、これを『菜の花と小娘』の草稿とみなすことができるだろう。「（三九。四。二。）　鹿の山に於て」という末尾の記述から、高等科三年次の明治三九（一九〇六）年四月二日に千葉県の鹿野山滞在中に執筆されたものと推定できる。したがって、先に引いた「高等科の頃、一人上総の鹿野山に行つた時書いた「菜の花と小娘」」（傍点稿者）とは、正確にいうと、この「花ちゃん」のことを指している可能性が高いと考えてよいだろう。ただし、同じ「高等科の頃」（傍点稿者）であることにはちがいはないが、これも先に引いた「明治三十五年頃」（中等科六年次）や「明治三十七年」（高等科一年次）、「日露戦争の時」（高等科一～三年次）という、作者が具体的に示した執筆年などとは合致しないという疑問点はなお残ってしまう。

その一方で、志賀直哉の日記のなかの、明治三七（一九〇四）年五月五日には「作文は菜の花をあんでるぜん張りにかく」（傍線原文）という記述がある。先の新書版全集で示された執筆年月日との一致やタイトルの類似性、アンデルセンの影響という観点から、この作文もまた草稿のひとつとみなすことができるが、しかし現存していないために、詳細については知ることができない。ただしまた、先に触れた「明治三十七年」や「日露戦争の時」という執筆時期についての記述とは一致してもいるのである。

このように不分明な点がいくつも残るのだが、それでも窺うことができるのは、作品の生成過程にはおよそ、つぎのような四つの段階があったということである。

① 作文「菜の花」（明37・5・5＝高等科一年次執筆、現存しない）
② 草稿「花ちゃん」（明39・4・2＝高等科三年次、鹿野山において執筆、四〇〇字詰め原稿用紙に換算して約一二枚、現存する）
③ タイトル名不明の「ある婦人雑誌」への投稿原稿（大8執筆・投稿か、同換算で「六枚」、現存しない）
④ 初出『菜の花と小娘』（『金の船』大9・1発表、同換算で約九枚）

①はじめに、明治三七（一九〇四）年五月五日、学習院高等科一年次の志賀は、当時関心のあったアンデルセンの真似をして、高等科での課題のようなものに対する取り組みの一環として、「菜の花」というタイトルの作文を書き、②次いで、約二年後の明治三九（一九〇六）年四月二日、高等科三年次のときに、作文「菜の花」をもとにして、四〇〇字詰め原稿用紙でいうと一二枚ほどの「花ちゃん」というタイトルの作品に仕上げ、③さらに、約一三年ぶりに草稿「花ちゃん」を半分の「六枚」（「続創作余談」）に短く改稿したうえで、『菜の花と小娘』を『金の船』に発表する前年の大正八（一九一九）年ごろに「ある婦人雑誌」（同前）に投稿したが、結果は没書、④没書となった原稿は返却されなかったものの、それをもとにした九枚ほどの原稿を改めて執筆し、最終的に『菜の花と小娘』として大正九（一九二〇）年一月の『金の船』に発表するにいたった、というような流れがあったと推定することができるだろう。なお、初出『菜の花と小娘』はその後、先に触れた短編集『荒絹』（前出）に収録されるときに手直しされるが、それは表現に若干異同があるくらいのものなので、本稿ではとくに両者が異なるものとしては扱うことはしない。

3

『菜の花と小娘』が、若き日に愛読していたアンデルセン童話の影響で書かれたことはすでに触れた。それでは、志賀直哉はアンデルセンのどのような作品を、いつごろ、またどのようにして読むことになったのだろうか。十分な資料が残されているわけではないので限界はあるのだが、それでも可能な限り、随筆や日記、手帳、ノート、対談などを通じてその形跡を追ってみよう。

志賀直哉が最もはじめに読んだアンデルセンの作品は、おそらく「小クラウスと大クラウス」である。ただし、彼が読んだテキストは、「紅葉山人」、すなわち尾崎紅葉が書いた「二人（にん）むく助（すけ）」という翻案なので、後でも少し述べるように、厳密にはアンデルセンの作品だということはできず、したがってこの時点から彼がアンデルセンの影響を受け始めたということにはならないだろう。

「二人むく助」などのお伽話を少年時代に読んだということについては、志賀自身がいずれも戦後になってから、随筆「愛読書回顧」（『向日葵』昭22・1）や谷崎潤一郎との対談「回顧」（昭24・6）などのなかで、繰り返し回想して語っている。たとえば、「子供の頃読んだ物では、巌谷漣山人（＝巌谷小波――括弧内稿者）の「こがね丸」、これは平安朝の犬の話だつたと思ふ。それから紅葉山人の翻案の「二人椋助」、これはアンデルセン原作だと後で聞いた。この二つが面白かつた」（「書き初めた頃」、『文学の世界』昭23・5）とあるように、「二人むく助」を、近代日本児童文学の確立者ともいわれる巌谷小波の「こがね丸」（博文館、明24・1）と同時期に愛読しながら、しかし原作者のアンデルセンと結びつけて読んではいなかったことが明らかである。あるいは、「こがね丸」は当時、「少年文学」として人気

を博した作品なので、叢書「少年文学」第二巻の「二人むく助」は同じ「少年文学」という括りのなかで受けとめられ、したがって「二人むく助」の読書体験はアンデルセンとは結びつくことのない体験だったということもできよう。

また、「漣山人の『こがね丸』をはじめて読んだのは初等科の四五年頃だつたと思ふ」（「S君との雑談」、『中央公論』昭27・7）と回想し、他方で「お伽噺は、第一巻が「黄金丸」、第二巻がアンデルセンの翻案で「二人椋助」だつた。この「黄金丸」が私の単行本で読んだ最初の本だ」（「幼い頃」、『図書』昭28・11）と回想しており、叢書「少年文学」の第一編である「こがね丸」に続いて、第二編の「二人むく助」を読んだと考えられるので、「二人むく助」を読んだ時期は、少なくとも学習院初等科（明治二二から二八年まで在学）の後半以降の時期だと推定することができるだろう。博文館から刊行された「少年文学」第二編「二人むく助」は、明治二四（一八九一）年三月に刊行、再版は五か月後の同年八月のことなので、志賀は初版や再版の刊行の翌年以降、すなわち明治二五年から二七年くらいまで、満年齢九歳から一一歳くらいまでの間に読んだ、ということになるだろう。なお、この尾崎紅葉によって翻案された「二人むく助」と、アンデルセンの原作「小クラウスと大クラウス」とが、単なる言語の移し変えにはとどまらない別次元の作品であることについては、別の機会に譲りたいが、たとえば、本来原作にはなかった、「善人なりとも愚鈍は亡び、悪人ながら智者は栄ゆる世の例。合点が参らば御学び候へ、どなたも、〳〵」[3]という、狡知にたけた主人公を賞賛するような処世訓が新たに加えられたことが、そのことを端的に示しているということができるだろう。

このように志賀直哉は学習院初等科時代には、まだアンデルセンとの実質的な出会いがあったわけではない。「愛読する」というような意味での実質的な出会いは、後で述べるように、作文「菜の花」を書いた、明治三七（一九〇四）年五月ころのことだと考えられるが、それ以前の時期で確認することができるのは、森鷗外の翻訳によるアンデルセンの長編小説「即興詩人」への関わりであるだろう。後年に志賀は、「アンデルセンの方は鷗外の「即興詩人」が出たあ

と、英訳本でお伽噺などを読んだ」（「書き初めた頃」、前出）と回想している。ここから窺えることは、志賀がアンデルセンの童話に親しむようになった契機は、この鷗外訳の「即興詩人」の刊行にあったようだ、ということである。

「即興詩人」が春陽堂から刊行されたのは、明治三五（一九〇二）年九月であるが、志賀が刊行と同時に、あるいは直後に、読んだかどうかは分らない。しかし、明治三七（一九〇四）年二月二四日の志賀日記には、「昼から休んで有島の家に行き「アンヌンツィアタ」を読み（下略）」というように記され、また、随筆「興津――川村弘の憶ひ出」（『芳舟遺稿』、非売品、大2・7）では、「中学を出た翌年の春」、すなわち明治三七年四月の、川村弘・有島生馬を含めた睦友会の仲間との旅行を後年に回想しながら記述した一節に、「その頃有島と私とは昇之助といふ十三四の女義太夫をよく聴きにいつた。（中略）アンデルセンの「即興詩人」から、「吾々のアヌンチヤタ」ともいつたし、第十番目のミューズだともいつた」というようにもあるので、志賀は少なくとも刊行の約一年半後には、鷗外訳の「即興詩人」に関心をもっていたということができるだろう。なお、「アンヌンツィアタ」や「アヌンチヤタ」とは、「即興詩人」の主人公アントニオが恋心を寄せる歌姫の名前であるが、ここでは小説そのものを指す言葉として、また志賀をはじめ有島生馬や木下利玄など学習院の仲間たちの間で、贔屓にしていた娘義太夫・豊竹昇之助を賞賛する際の形容的な言葉として使われている。

さらに明治三七（一九〇四）年七月二九日の日記にも、「有島は昇の助の帰坂につき何かねぎらひたしといつていたが遂に即興詩人を贈らんといひし故（下略）」というように、昇之助に勇気を奮って贈り物をしようとする有島生馬を、後に生じるトラブルを危惧して志賀が制止しようとする、といったことが記されているが、憧れの昇之助への贈り物として「即興詩人」が選ばれていることからも、彼らの間でも「即興詩人」は話題となっていたことが窺える。このように学習院の仲間たちの間で話題になった鷗外訳の小説「即興詩人」によってアンデルセンを知り、これを契機にやがて

アンデルセンの童話に接近し、そして明治三七年五月五日の「あんでるぜん張り」（傍線原文、志賀日記、前出）の作文「菜の花」の執筆にいたった、というような筋道を推測することができると考えられる。

なお、ここで、「あんでるぜん」（傍点稿者）という表記について触れておきたい。今日では「アンデルセン」という表記が一般的だが、この明治三七年の日記のなかで志賀直哉は「あんでるぜん」と書き、他方先に引用した、昭和一三年発表の「続創作余談」のなかでは「アンデルセン」と記していた。デンマーク語原典からの最初の翻訳は、大畑末吉訳『アンデルセン童話集』全一〇冊（岩波文庫、一九三八～一九四六）であるが、それまでの長い間は英語やドイツ語、フランス語による重訳が一般的だったこともあって、たとえば明治四三から四四年にかけて刊行された書籍に限ってみても、『アンダセン原著　教育お伽噺』（和田垣謙三・星野楽天、小川尚栄堂、明43・10）、『アンデルゼン物語』（内山春風訳、春祥堂、明44・3）、『安得仙（アンドルセン）家庭物語』（上田万年、鐘美堂、明44・3）、『アンダアゼンお伽噺』（近藤敏三郎、精華堂書店、明44・4）というように、いくつかの異なった呼称が用いられている。滑川道夫氏によれば、ともに冨山房から刊行され、「大正期に多くの読者をひきつけた長田幹彦訳の「アンデルセン御伽噺」（大正6・8）や楠山正雄編の「世界童話宝玉集」（大正8・12）は「アンデルセン」の呼称を普及させることに役立」つ大きな契機となり、さらに「大正末年には、アンデルゼン、アンドルセン、アンダアゼン、アンダアセン、アネルセン、アンナスンなどを一本にしぼって、アンデルセンに統一しようという動きがあらわれた」[4]（傍点原文）という。志賀による表記は、いずれも志賀日記中の、明治三七年六月五日、九月五日、同月八日、同月二〇日、四〇年五月二五日の記述や、明治三九年一月九日執筆の「未定稿13　お竹と利次郎」ではいずれも「アンデルゼン」（傍点稿者）であるが、大正二年五月執筆の随筆「興津――川村弘の憶ひ出――」、大正五から七年にかけて記されたと推定される「ノート13」（二〇〇二年岩波書店刊行の『志賀直哉全集　補巻六』収録）、大正一三年『日光』発表の随筆「木下利玄」のいずれも、「アンデルセン」

（傍点稿者）と統一して記されている。つまり、志賀の場合、明治期に用いていた「アンデルゼン」を、大正期以降は「アンデルセン」と改めて表記するようになっており、滑川氏が指摘した状況とほぼ符合するということができよう。

4

先に挙げた、③没書となった「ある婦人雑誌」（「続創作余談」）への投稿以前に、①作文「菜の花」と②草稿「花ちやん」がそれぞれ執筆されていたことは、すでに述べた。アンデルセン童話を彼が集中的に読んだのは、やはり①と②をそれぞれ執筆した前後の時期だったようである。その形跡は、断片的ではあるが、おもに彼の日記や手帳などのなかに確認することができる。

はじめに、①作文「菜の花」を書いた明治三七（一九〇四）年五月前後の時期に志賀がアンデルセン童話を読んだ痕跡についてだが、それは日記のなかに窺うことができる。この年の六月五日の日記に「志賀のアンデルゼンの雛菊、一寸面白し」とあり、四日後の九日の日記には「演説会にてひな菊の話をする　先づ出来よし」と記されている。「志賀のアンデルゼンの雛菊」という表現は分りにくいが、それは、一か月前に書いた作文「菜の花」が「あんでるぜん張り」（傍線原文、志賀日記、前出）だったことから推測すると、アンデルセンの「ヒナギク（The Daisy）」[5]を真似たもの、というように解釈できるだろうか。六月五日の日記には、学習院高等科の友人・黒木三次の自宅に、志賀も含めて学友「十六人」が集まってそれぞれが「話」を行なったことや、それらについての簡単な評価が付記されているので、これは九日に行なわれる「演説会」のためのリハーサルだと推測することができるだろう。アンデルセンの「ヒナギク」を真似て志賀が「雛菊」「ひな菊」という話を演説会でしたのだとすれば、当然、それよりも前に「ヒナギク」を読んで

いたことになる。むろん同じことは、作文「菜の花」を書いたときについても言うことができる。つまり、この作文を「あんでるぜん張り」（前出）に書くためには、その前にアンデルセンの作品そのものを読んでいる必要があるのはいうまでもない。しかしこの時点では、志賀がアンデルセン童話のなかのどのような作品を読んだかについては特定できない。したがって、具体的にアンデルセン童話作品を読んだ最初の痕跡は、こうしたところに見出すことができると考えられるのである。

「ヒナギク」に関連すると考えられる記述以後で、志賀日記にアンデルセンに関わる記述が再び現れるのは、その四か月後の明治三七（一九〇四）年九月のことである。該当する箇所を抜き出してみよう。

九月三日　此日 Andersen's Fairy Tales（一円）丸善より送り来る
九月五日　アンデルゼンの話三種程よむ、What the Moon Saw 最も面白さうなり
九月八日　アンデルゼンを少しくよむ
九月十日　A Story of a Mother をよむ
九月二十日　朝車の中にてアンデルゼンの Buck-wheat をよむ　帰りは Wild Swan を少し読む

このように作文「菜の花」の執筆や演説会での「雛菊」「ひな菊」の講話を終えた後も、志賀は引き続きアンデルセン童話に関心をもって読んでいたことを窺うことができる。彼が「アンデルセンの方は鷗外の「即興詩人」が出たあと、英訳本でお伽噺などを読んだ」（「書き初めた頃」、前出）ことはすでに触れたが、丸善を通じて「Andersen's Fairy Tales」という英訳本を入手してからは、このお伽話集によって多くのアンデルセン童話を読んだり、読もうとしたりした様子

を窺うことができる。すべての作品名を記しているわけではないようだが、明記されたのは、いま引いたとおり、「What the Moon Saw」（「絵のない絵本」[6]）、「A Story of a Mother」（「ある母親の物語」）、「Buck-wheat」（「ソバ」）、「Wild Swan」（「野の白鳥」[7]）の四編である。

このように明治三七（一九〇四）年の春から秋にかけて、志賀直哉は集中的にアンデルセン童話を愛読していたということができるが、それ以後では、明治三九（一九〇六）年から翌四〇（一九〇七）年にかけても、同じようにアンデルセン作品に親しんだ形跡がある。たとえば、「1906. 1.9」（一九〇六・明治三九年一月九日）と執筆年月日が明記された「未定稿13　お竹と利次郎」なかに、「彼は歌人でアンデルゼンの愛読者であるもの、こんな事は望めないと断念した」というような記述が見られる。この未定稿の末尾近くで、「着想は、木下と広勝の関係を空想でフエンしたのがお竹、利次郎の関係である」というように創作の背景が述べられているので、主人公のモデルは、志賀の学習院の友人で歌人の木下杢太郎であることが分かる。[8] ある程度の困難を引き受けなければならない、華族と平民という、いわば身分違い恋を成就させるには彼はあまりに柔弱で繊細に過ぎる、と志賀に批判的に見られているが、木下のこうした性質を表わす際にアンデルセンを想起し表現に用いたことが、アンデルセンに対する志賀の関心を示していると考えられよう。

また志賀が記した手帳を見てみると、明治三九（一九〇六）年五月一四日から同年六月一六日ころにかけて記された「手帳3」（全集第一五巻）のなかには、「○即興詩人」や「即興詩人　二冊」などのメモがあるので、二年前の明治三七年に読んだ「即興詩人」に対して再び関心を寄せたような跡も窺える。さらに「手帳6」（明39・12・16～40・2・16ころ、同全集第一五巻）のなかには、「借りてある本」というリストに「Andersen　2. 6　武者」とあるので、アンデルセンの本を明治四〇年二月六日に武者小路実篤から借りていたことや、あるいは志賀日記の明治四〇年五月二五日に「〔発信〕細川へアンデルゼンと手紙を送る」とあるので、友人・細川護立にアンデルセンの書物を送ったようなこ

と、あるいは、「手帳7」（明40・5・13～7・11、同全集一五巻）に「Hans Christian Andersen　10 Volumes $10.00」とも記されていて、一〇巻本のアンデルセン作品集のようなものを購入する予定だったような跡も見受けられる。このように明治三九年から四〇年にかけても引き続きアンデルセンに関心をもち、またこうした関心は志賀個人のみならず、後の『白樺』同人となる学習院の友人たちの間でも共有されていたような様子を窺うことができるのである。

さらに、その後の大正期に入ってからのことを付け加えると、大正五（一九一六）年から七（一九一八）年にかけて記されたと推定される「ノート13」（『志賀直哉全集　補巻六』、岩波書店、二〇〇二・三）のなかには、ページの欄外に「アンデルセンの話をする」と記された箇所がある。これは、「淫を避けよ」というキリスト教の教えに接する一方で、学校の下級生に対して同性愛的な欲望を抱いてしまう「自分」を描いた、小説の草稿のような叙述近くの欄外に記されたものなので、先に触れた明治三七年六月五日と九日の日記に書かれた「雛菊」「ひな菊」の演説のことを、小説の題材のひとつにしようとして書き付けられた構想メモであるようにも考えられよう。

5

先に学習院の仲間たちの間でアンデルセンの本の貸し借りがある一方、志賀直哉は丸善を通じて「Anderson's Fairy Tales」という英訳本を購入し、これをもとにいくつかのアンデルセン童話を読んだ形跡があることを述べた。それでは、この英訳本はいつどこから刊行され、どのような作品が収録されたものだったのだろうか。

結論から先に書けば、今回はこの書物を特定することはできなかった。調べてみると、志賀がアンデルセンに興味をもった明治中期・一九〇〇年前後には、少なくはない数の英訳本のアンデルセンお伽話集は出版されているし、他方で

この時期の書物には編・訳者名や書名、出版社などを明記した奥付が必ずしも付されているわけではないために、そもそも刊行年が不明であるとか、表紙と背表紙、扉ではタイトルがそれぞれ異なっていたりするとか、あるいは、志賀日記に記された「Andersen's Fairy Tales」というお伽話集の書名自体がどこまで正確なものであるのかというような問題も多々あって、志賀が入手した書物を特定するのは困難なことであった。

しかしながら、参考までに、志賀日記に書きとめられたのと同じ「Andersen's Fairy Tales」という書名をもつもので、明治期中ごろから大正期初頭にかけて、すなわち一九世紀末から二〇世紀初頭にかけて出版されたと推定できる英訳本を複数取りあげ、少しく検討してみよう。ただし、この「一九世紀末から二〇世紀初頭にかけて出版されたと推定できる」は、繰り返し述べるように書物の刊行年が記されていないために、あくまでも私個人による「推定」の範囲内に留まってしまうことになる。ただし、「1914」（大正三）年というように刊行年が本の扉に明記された、明治大学図書館所蔵「FAIRY TALES AND OTHER STORIES」（W.A. & J.K.CRAIGIE 訳、OXFORD UNIVERSITY PRESS、ただし背表紙の書名は「HANS ANDERSEN'S FAIRY TALES」、収録作品数は六〇）という書名をもつ本をひとつの基準にして、表紙や各々のページなどに現れる経年による変色や傷みの具合によって、この本とほぼ同じかそれより古い時期に刊行された書籍だとみなすことができるものを、任意につぎのように三冊選んでみることにする。左に掲げるカギ括弧内の書名について、①と②は扉に、③は表紙および背表紙にそれぞれ記されたものである。

① 立教大学図書館佐々木文庫所蔵「ANDERSEN'S FAIRY TALES」（訳者は不明、GEORGE ROUTLEDG AND SONS, LIMITED、ただし表紙の書名は「Hans ANDERSEN'S Fairy Tales」、収録作品数は四八）

② 立教大学図書館岸田文庫所蔵「Andersen's Fairy Tales」（訳者は不明、Collins' Clear-Type Press、ただし背

表紙の書名は「FAIRY TALES」、収録作品数は三六）

③　西南学院大学図書館所蔵「ANDERSEN'S FAIRY TALES」（R. NISBE'T BAIN 訳、WARD,LOCK & CO, LIMITED、ただし扉の書名は「FAIRY TALES AND STORIES」、収録作品数は五九）

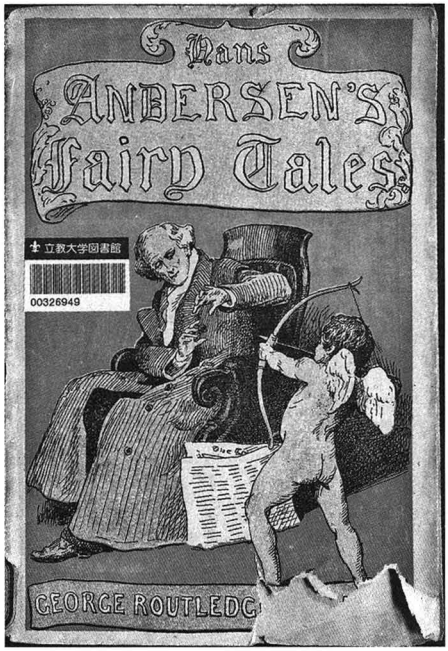

写真１　①立教大学図書館佐々木文庫所蔵本　表紙

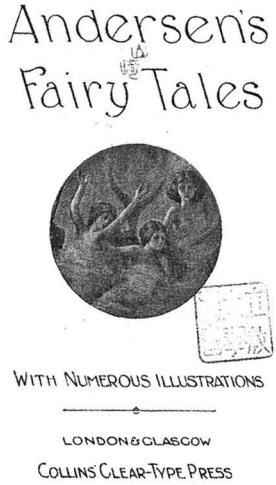

写真2　②立教大学図書館岸田文庫所蔵本　扉

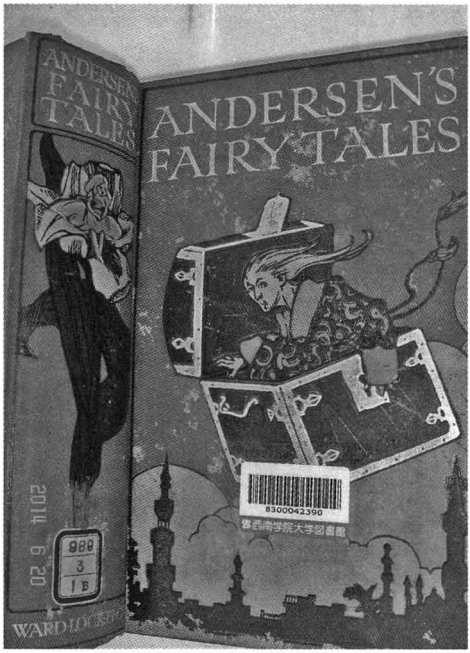

写真3　③西南学院大学図書館所蔵本
表紙および背表紙

先に触れたように、日記によると、志賀直哉は明治三七（一九〇四）年九月三日に「Andersen's Fairy Tales」を入手し、このお伽話集をもとにして、少なくとも同月二〇日までの間に、おそらく数々のアンデルセン童話を読んだものと思われるが、そのなかで具体的な作品名が記されているのは、（a）「What the Moon Saw」、（b）「A Story of a Mother」、（c）「Buck-wheat」、（d）「Wild Swan」の合わせて四作品だった。右の①には（b）（c）（d）の三作品[9]が、②には同じく（b）（c）（d）の三作品[10]が、③には（a）（c）（d）の三作品[11]がそれぞれ収録されている。したがって、四作品すべてを収録した書物は①②③のなかに一冊もなく、このため志賀が購入したアンデルセンのお伽話集は少なくともこれらの三冊ではない、という結果となる。

これまで『菜の花と小娘』に及ぼしたアンデルセンの影響を明らかにするための基礎的な作業として、この作品の生成過程と、志賀のアンデルセンへの接近の様相と読書の閲歴について検討してきた。最終的に『菜の花と小娘』が完成するまでに要した期間は長期にわたり、しかもそのプロセスは錯綜しているが、おおよそ、作文「菜の花」、草稿「花ちやん」、「ある婦人雑誌」への投稿原稿といった段階を経て、ようやく初出『菜の花と小娘』として完成にいたった、と考えることができる。一方で、日記や手帳などから確認されることは、志賀がアンデルセン童話に関心をもち集中的

に読んだのは、明治三七（一九〇四）年の春から秋にかけてと、明治三九（一九〇六）年から翌四〇（一九〇七）年にかけての二つの時期だったということである。これらは作文「菜の花」と草稿「花ちゃん」の執筆時期とそれぞれ重なっており、これらの作品がアンデルセンの影響を強く受けていると考えられることは、改めていうまでもない。

しかしむろん、アンデルセンの影響は、ともに習作時代に書かれた、作文「菜の花」と草稿「花ちゃん」に留まるわけではない。志賀が『菜の花と小娘』を発表した大正時代中期は、巌谷小波を中心とする明治期のお伽話の時代からの脱皮を図った、新たな児童文学興隆の時代でもあった。鈴木三重吉が主宰し大正七（一九一八）年七月に創刊された『赤い鳥』の成功を受けて、『菜の花と小娘』が掲載された『金の船』をはじめ、『おとぎの世界』『童話』『コドモノクニ』といった類似雑誌が次々と創刊され、こうした児童文学雑誌に芥川龍之介や有島武郎、宇野浩二、佐藤春夫、島崎藤村、有島生馬など一般の作家もまた、寄稿や監修というかたちで関わったのだった。このような状況のなかで、児童文学雑誌『金の船』から原稿依頼があったとき、草稿「花ちゃん」に手を入れながら、志賀は再び、「アンデルセン張り」（前出）に書くという手法を少なからず意識したにちがいない。そうであるとすれば、アンデルセンの影響は、大正九年の『菜の花と小娘』にまで及んでいることになるだろう。

このようにしてみると、アンデルセンの影響は作文「菜の花」から初出『菜の花と小娘』にいたるまでの長い期間にわたって及んでいたことになるが、そうであれば必然的に、それぞれの時期に受けた影響の内実は、微妙に異なるものであるにちがいない。これは志賀個人の発達成長段階に還元させて考えられるばかりでなく、各時代による、日本児童文学におけるアンデルセンの受容の仕方の違いや子ども観そのものの変遷とも対応させて考えられるべきことであるだろう。今後はこうした点を踏まえながら、現存する草稿「花ちゃん」や『菜の花と小娘』本文そのものに即して、アンデルセンの影響や受容について細かく検討する必要があるにちがいない。さらに志賀直哉がこの作品を「処女作」と位

置づけることに意欲的だったことは、はじめに述べたとおりだが、志賀直哉文学の源流を探る試みの一環としてもこの作品を検討する必要があると考えているが、これらのことについては別の機会に譲りたい。

注

（1）作者自身によって「三つの処女作」のうちのひとつに数えられた『菜の花と小娘』以外の作品とは、周知のとおり、大正七年三月の『中央文学』に発表された『或る朝』と、明治四三年四月の『白樺』創刊号に発表された『網走まで』の二編である。

（2）昭和一三（一九三八）年六月発行の『改造』の初出時には「中学の終り頃」と記されていたが、昭和三〇（一九五五）年九月に刊行された新書版『志賀直哉全集　第十巻』に収める際に、このように「高等科の頃」と書き改められた。

（3）『紅葉全集　第二巻』（岩波書店、一九九四・七）、四二三頁。

（4）滑川道夫「日本におけるアンデルセン研究の展開――蘆谷蘆村（重常）の研究業績を中心として――」（日本児童文学学会・山室静編著『アンデルセン研究』、小峰書店、昭44・10）、三九ページ。

（5）「ヒナギク」という日本語タイトルは、大畑末吉・訳『完訳 アンデルセン童話集（一）～（七）』（岩波文庫、一九八四・五）にならった。また、「The Daisy（ヒナギク）」は、本文で取り上げた①から③の三冊の英訳本「Andersen's Fairy Tales」にもそれぞれ収録されていることを確認した。

（6）最新の『志賀直哉全集　第十一巻』（岩波書店、一九九九・一一）の「日記注」（二九〇ページ）には、「What the Moon Saw アンデルセンの童話「古い墓石」（一八五五年）。」と注記されているが、「古い墓石」の英文タイトルは、「The Old Tombstone」ではないだろうか。

（7）（5）と同様に、これら四編の日本語タイトルはいずれも、大畑末吉・訳『完訳 アンデルセン童話集（一）～（七）』、および大畑末吉・訳『絵のない絵本』（岩波文庫、一九七五・一一）にならった。

（8）随筆「木下利玄」（『日光』大13・4）のなかでも、木下利玄が「アンデルセン好きとな」ったことが述べられている。

（9）ただし、この書籍では、（b）「The Story of a Mother」、（c）「Buckwheat」、（d）「The Wild Swans」とそれぞれ表記されている。

（10）ただし、この書籍では、（b）「STORY OF A MOTHER」、（c）「THE BUCKWHEAT」、（d）「THE WILD SWANS」と

それぞれ表記されている。

(11) ただし、この書籍では、(c)「The Buckwheat」、(d)「The Wild Swans」とそれぞれ表記されている。

※ 志賀作品からの引用は、全一五巻からなる『志賀直哉全集』(岩波書店)と全二二巻・補巻六からなる『志賀直哉全集』(岩波書店)に拠った。ただし、旧漢字は新漢字に改め、ルビは適宜省略した。

(とみざわ・しげみ　政治経済学部准教授)